

COMBAT

9 2002
SEPTEMBER

平成14年9月1日発行(毎月1回1日発行)第23巻第9号(通巻318号)昭和55年8月2日第31種郵便物認可

コンバットマガジン

米海兵隊直伝、
究極のカモフラージュ・
テクニック

ザ迷彩術

米・タイ合同軍事演習

コブラ・ゴールド

日本代表チーム
大健闘!?

2002 NRA ビアンキカップ

LOW LIGHT FIGHTER

イチロー、
シュアファイヤーの
CQBフラッシュ・テクニック





ロウライトとは

光量が少ないという意味

実にガンファイトの70%以上は

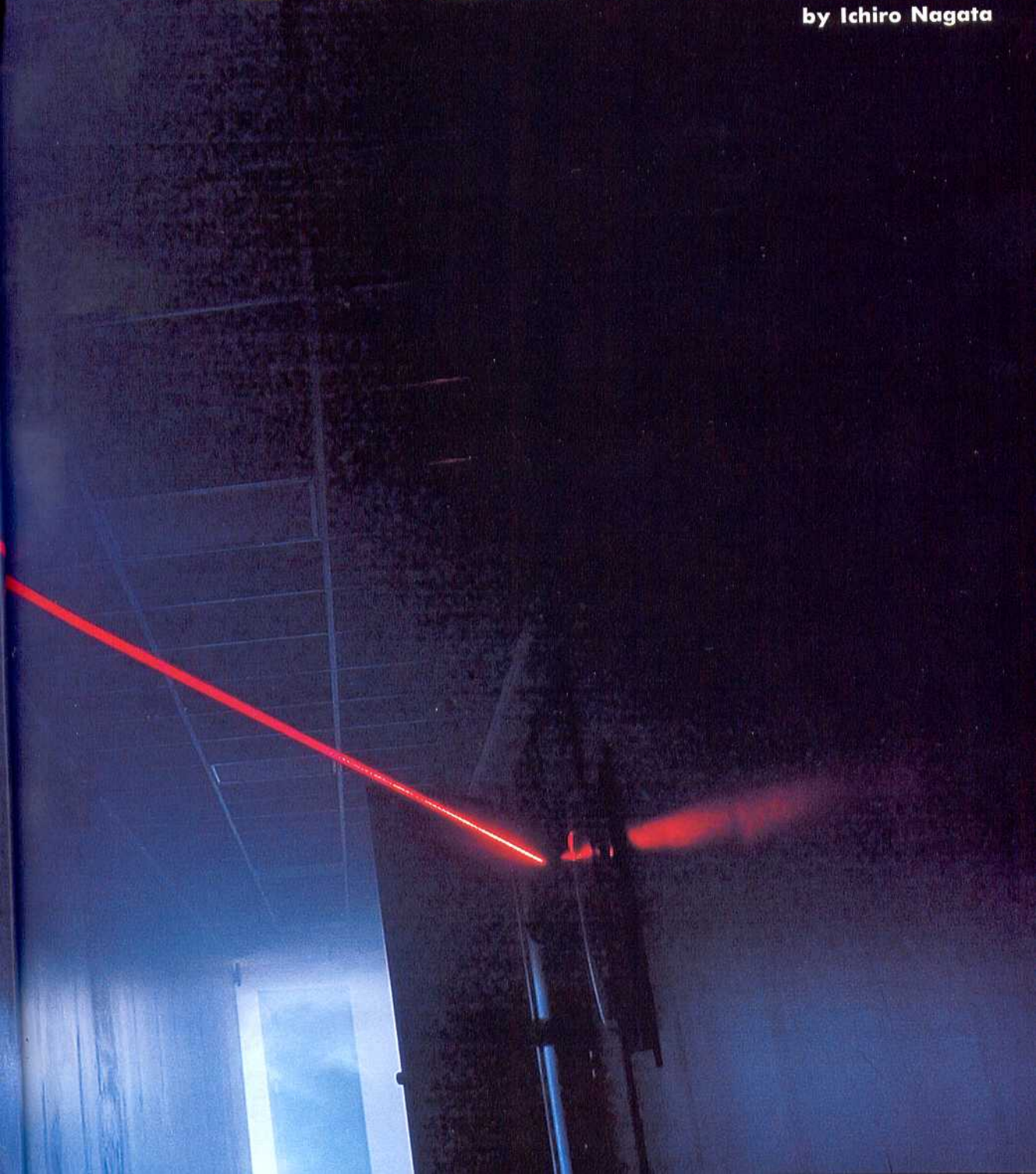
このロウライト状況下で起こる

暗闇での闘い方を知らずして

ガンファイターの生き残りはありえない

LOW LIGHT FIGHTER

by Ichiro Nagata



闘いのツールとして開発されたライト。それは、強力な光線を敵の目に浴びせることで新たな戦術を展開できるシユアファイヤ社のフラッシュライト。

今どき、アメリカのSWATでシユアファイヤを使用していない所があるだろうか？

ミリタリーの特務部隊でシユアファイヤを採用していない所があるだろうか？

突撃プロの代表格、ネイヴィーシールドやデルタチームなどにいたっては、独自のスペックにそったウエポンライトの開発を依頼するほどにシユアファイヤの存在を重要視している。

CQBは室内の闘いだ。ロウライト下での作戦が多い。夜などは建物の電気を切った暗黒での撃ち合いに持ち込むのが普通だ。

今や、シユアファイヤの使用方を知らずしてCQBを語る教官は時代遅れだろう。

そういったアメリカの現実とはウラハラに日本の自衛隊や警察では“懐中電灯は自分の存在を敵に察知されてしまう危険な道具”といった程度の認識がまだまだ強いと思う。

さてさて、

シユアファイヤ社には「シユアファイヤ インスティテュート」という教練機関が設けられている。

このスクールは、ケン グッドという男を担当主任として運営されている。

ケン グッドは、シールドチーム出身。ケンは、この世界では知名度が高いので知っている人もいると思う。

このスクールの内容は豊富だ。依頼する機関や団体の要求や水準に合わせたコースを設定してくれる。

1日だけでもあれば、2日間の短期訓練というものもある。

このインスティテュートは、要請があれば外国にも行く。ヨーロッパでも教えれば、シンガポールのポリスも訓練している。

ワシは、1日の訓練を受けたことがある。そのころは、デイヴというシールドチーム出身の教官だったが、シユアファイヤの威力に驚きを感じたものだった。

わずか8時間の訓練とはいえ、知ると知らざるとでは雲泥の差を生じるもの。

その後、ケン グッドが就任したのでふたたびワンデイコースを受講した。ここで現代の先端をいくCQBのテクニクに触れて目からウロコが落ちる思いをした。



ケン グッドを中心としたシユアファイヤ インスティテュートのインストラクターズ。このグループが世界を回って訓練する。

LOW LIGHT FIGHTER



フル装備要求なので、ワシはマリーン採用のボディーアーマーを着た。ウエポンはナイフM4（セミオート）それとSIG P226をサイドアームとしてマグパウチに突っ込んだ。サイホルスタは、走るときグラグラして動きを妨げるので好きに「れない」だよ。



ケン グッド。スウィールチーム出身。プロの世界では有名な存在だ。ケンに育てられたロウライト指導教官は、これまでに800人を教える。



ケンは惜しげもなく自分のテクニックを披露する。巧いので驚く。誰かで力強い射撃のテクだ。LAPDのスコットと同様に実力派だ。

若いころ、強い男になりたいという動機からスウィールチームに入隊したというケン グッドとは気が合った。個人的なレッスンも受けるようになった。

“どうだイチ…ひとつシュアファイヤの公認インストラクターにならんかい？”

最近になって、シュアファイヤ社のディレクターのキャメロンから、そんな誘いがあった。日本でのシュアファイヤ需要は拡大傾向にある。個人購入に続いて官公庁からのオーダーも増えはじめた。

やがては、日本もシュアファイヤのテクニックを知る必要が生じるはずだというのだ。



強力な光線を照射し、敵の目を不能にさせながら、こちらからは相手が明瞭に見える、という新しい訓練のコンセプト。

日本で教えるには日本語で教えないと微妙な部分が伝わらないし、日本流のアレンジも必要だろうという。

まあしかし、公認の教官免状を貰えるのは嬉しいが、ワシが日本に行って教官を務めるなんて非現実的なハナシだ。コチトラはウレシてるフォトグラファーがイイよ。遊びがてらのヴォランティア無給教官ならやるが、プロの教官はゴメンだな。老骨にキツすぎる。

そこで、他に日本人のインストラクターを育てることにした。

本来ならシュアファイヤの代理店をやっているファーストやシーザムから人選をしたかった。だが、公認の教官になるためには5日間にわたる特訓を受けて合格する必要がある。その訓練には誰でも耐えられるだろう、しかし問題がある。実弾射撃だ。

ボディアーマーを着てハンドガンとセミオートのリフルを昼も夜もウントコサ撃つのだ。それも片手にライト、片手にガン。しかも構えを大きく変えたり、歩き回りながら撃ち続けるという内容なのだ。

「ポリスクラスのガンの腕前が必要」という前提があったわけね。

まあ、先端のCQBテクニックを覚えようというのだから、ちとばかりターゲットを撃つくらいは経験じゃダメだろう。銃を撃てない者が参加できないのは当然といえる。

真剣な態度、ガンが巧い、英語ができる。これが条件だ。

そこで考慮したあげく、3人を選んだ。まずは、トモ。ガンは巧いし覚えは速いし真面目な性格だし英語もできるので即決。

つぎは山下刃物のヨシ。ガンは巧いというほどではないが、イチローガン団の特訓を受けているので恥ずかしいことはない。真面目でヤル気があり、英語がまずまず。

もうひとり、機密保全のためにナイショだが、コトが起これば命を投げ出して日本国民のために闘ってくれる男だ。

ヒアンキカップの直前なので石井やヤダもいて候補だったが、新人の教育などもあって練習から抜けれなかった。

かくして、4人はシュアファイヤ教官の免許を獲得するためにバーバンクポリスの訓練場に向かった。

5日間、50時間にわたる教習が始まる…。





LOW LIGHT FIGHTER



犯人、追われる者、逆襲者などは暗い場所を好んで潜むもの。そうして敵が外から侵入してくると、そのシルエットを狙って撃ってくる。だから、メッタなことでは暗い場所に近づいてはならない。

しかし、こちら側に強烈なライトがあればハナシは違う。いきなり太陽のように明るい光線を受けると目が幻惑されて、撃つ気も萎えるのだ。光を照射されたということは同時にガンポイントもされているだろうという感覚がさらに抵抗意識を削いでしまう。



フラッシュライトと銃を握る方法は多い。



手の甲と甲を強く密着させて安定させる。



普通のライトは親指でスイッチを操作する。



ライトのスイッチによっては上から添える。



大型の長いライトは、このように……。



拳銃の下部にスイッチを当てて点滅させる。



銃を握った指先をライトの先に引っかける。



ライトを横から当ててスイッチは手の平で……。



COBでは、ただ突っ立って撃つということなど有り
ない。動き、曲り、屈み、縮みなどしながら撃つものた
たがって銃とライトの持ち方には自在な融通性が望ま

LOW LIGHT FIGHTER

足を前方に投げ出した低い構え。ベッドの下などのよ
うな低い所を狙う。





スタンディングのひとつの典型。ライトを持つ手は上下左右と自由に動かせる必要がある。

昔から、銃とフラッシュライトの持ち方は多くの方法が試行錯誤されてきた。

片手にライト、一方にはハンドガンを握るとなるとグリップングが不安定になるのは避けられない。そこで両方の手をいかに結合させて連射時における安定度を高めるかということに苦心するわけだ。



スットと膝を落としたニーリング。机の下などの中低位置を確認するのによい。

たしかに、両方の手を合わせることで射撃の安定度は上がる。しかしそれらは、ただ立って正面を撃つときにしか役立たない。

複雑に入り組んだ狭い家屋をアタックするときは、上下左右に素早くライトとガンを振りながら歩くことになり、高中低とスタンスも目まぐるしく変化させる必要がある。同時にスイッチの点滅も多々行なう。ライトを点けばなしで歩き回ることは、敵の格好なターゲットになるからだ。

状況に応じた適切なライトの点滅こそがロウライトでの銃撃戦を決定づけると思って間違いはないだろう。

そのような状況では、むしろライトと銃を握った手は分離して動かした方が柔軟性が高くなるとシュアファイヤでは考える。つまりライトの位置は頭上だったり、遠い横だったり、顔のすぐ横だったり銃の下だったり、身体の動きにそって自由に展開させよ、ということだ。



右手に銃、左手でライトを照射。基本姿勢。



親指をスイッチに当てながらライトを引く。



ライトを左手の中指と薬指の間に挟む。



一瞬、暗くなったらもう銃は左手に……スゴイ。



そのまま右手に被せる。



ライフルでも左右持ち替えはスベシ。ただしライトはマウントされているのがよい。



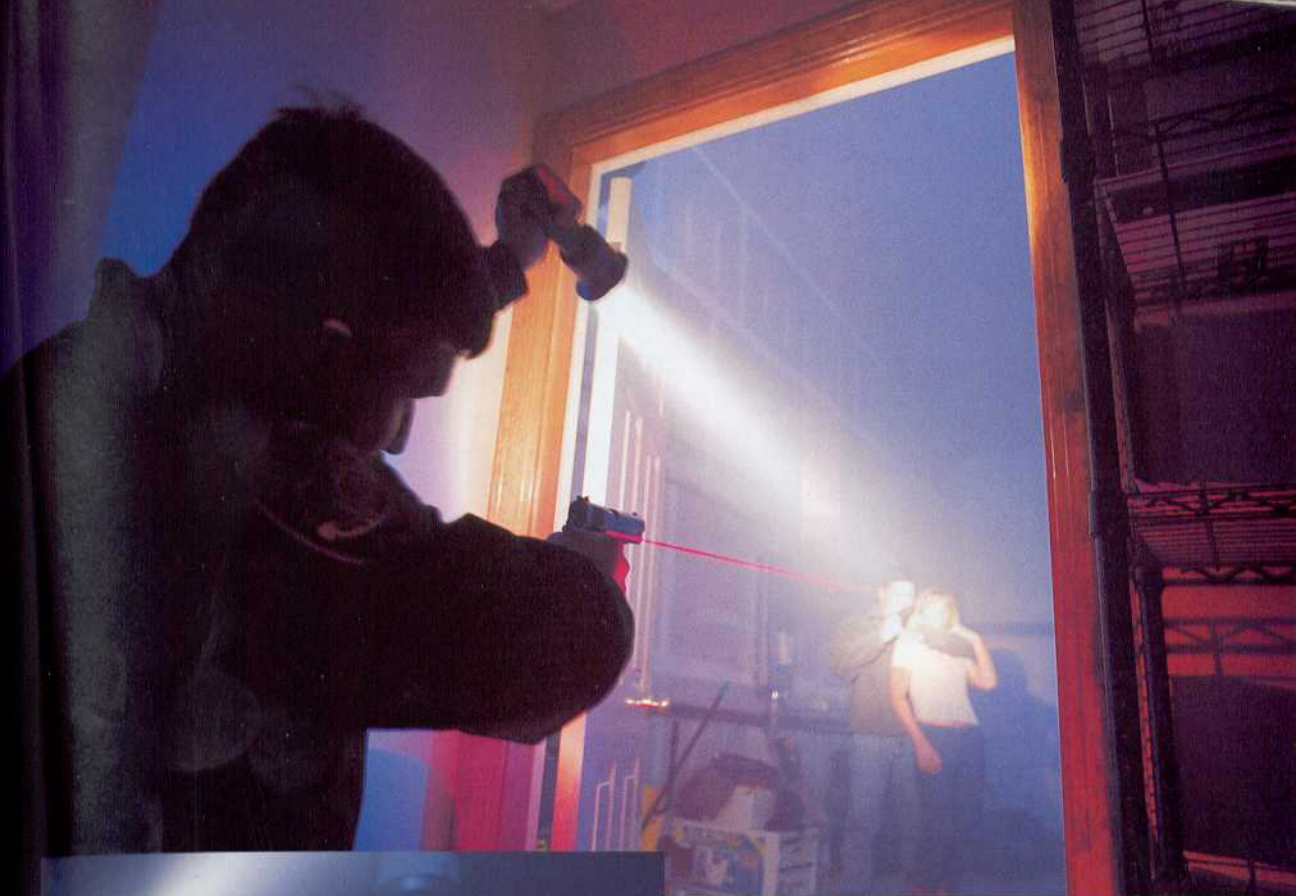
銃を左手に移しながら右手でライトを握る。

拳銃を右手、ライトを左手に持って敵と闘うというのは難しいことではある。反動の強い拳銃を片手で正確に撃つには訓練が必要なのだ。しかし、接近した闘いでは、さらにそれを逆に持ち替えて撃つことも必要になる。

つまり、ウイークハンドに銃を、ストロングハンドでライトを、というわけだ。こうなるともうシロートの範疇ではない。グラつく左手の銃で武装した敵と対峙しなければならぬなんて恐ろしいことだ。

しかし、CQBでの射撃は、左手で撃つか右手で撃つかの確率は半々なのだ。「なぜなら、自分の進行方向にある敵の存在位置は、左右のどちらかなのだから……。壁があって、その右奥に敵がいるなら左手で撃つのが現代の近接戦テクニックというわけだよ。

まさに「鍛練」が必要なのだ。



人質をとった犯人に対してはヘッドショットを決める必要がある。銃のグリップにレーザーデバイスが収納されているクリムゾントレイサーはシューアファイヤースクールでも推薦している。

LOW LIGHT FIGHTER



右手でしっかりと銃を握り、ライトは左斜め上に配置する。これはFBIから発祥したスタンスでタクティカルライトの基本といえる。

ライトは、使い方を誤ると自分の居場所を察知されて命を落とすことになる。あるいは、自分の仲間の姿を照らして敵に撃たれることにもなる。そのテクニックと戦術を徹底して習得しないと「生兵法」そのもの。危険なのだ。タクティカルライトを使用するにあたって大切なことは「長く点灯しない」ということだ。動きながらパッと点けて、そのまま進み、その瞬間に見えた風景を頭に刻む。その繰り返しで行動してゆく。「写真を撮る」とケンには表現する。チラッと見た瞬間映像のコマを見ながら敵の姿を求めて移動するのだ。けて同じ場所でピカピカやっちはいけない。キラッと光ったとき、もうそこには居ないというのがよい。壁があったら暗くして顔とライトをヒョイと出してパッと点灯する。次の瞬間には顔は引込める。そこに敵が潜んでいれば姿を確認できる。フラッシュのような短い閃光なので敵に撃つだけの時間は無いというわけだ。このようにして敵の存在を確認し、料理にとりかかる……。

敵を料理するといっても、ミリタリーが戦争で突入したのと、ポリスが犯人に遭遇する場合とではタクティック(戦術)が異なる。ポリスの場合は犯人射殺よりも逮捕することを目的とする。が、ハッキリ言えることは、相手が武器を持ち、こちらに向けていたら即座に撃つということには変わらない。



部屋にはミラーが多い。それをウっかり照らすと、自分や仲間の姿をくっきりと現わしてしまうので危険だ。気をつけよう。



部屋に入ると丸腰の男が立っていた。撃つワケにはいかず、ほっともおけない。伏せろと命令しても立っている。そういう場合は通りすがりに倒して進むのだ。



抵抗する相手は銃で撃つ。が、抵抗しない相手は片手で床に倒す。こういった訓練には合気道や柔術の技が取り入れられている。



至近距離から狙われるというのはCQBの常。一瞬のうちに適切に対処しなければ撃たれるのは必定。進入、ゲットの救済は素晴らしいとしか言いようがない。

CQBとは「クローズ クォーター バトル」のこと。その意味は「近接した闘い」だ。

どういうわけか、日本ではCQBを「限られた閉鎖空間での戦い」などと訳されているようだが、なんとなく誤訳だ。CLOSEには発音がふたつあり、同じスペルながらクローズとクローズに分れている。CQBのCはクローズの方だと解釈しよう。

0からクヤード程度の距離で闘うのがCQBの通常。建物の制圧や人質の救出を目的として考えられた闘いのテクニックだ。

さてさて、完全武装をして敵の居る建物に突入したとする。

すると敵がバタバタと現われて、キミはそれらを見つけ次第に次々と撃ち殺してゆく……というような単純なものではぜんぜんない。

相手も訓練された一人前のファイターだ。賢い方法でキミを殺そうと待ち構えている。これに対処するには慎重で確かなタクティクが必要だ。なかには、角を曲がったとたんに組みついてくる者いる。ナイフでかかってくる者いる。互いの銃と銃がガテンと鈍迫り合い状態になる場合もある。さらに敵がどうか判断のつかない者もいる。ただ立っている者、泣く者、狂い騒ぐ者、女もいれば子供もいる。けっして味方だとか無害だとか思っはいけない。そういうテを使って襲ってくる可能性は大きいのだ。

互いの手の届く距離での闘いは一瞬におこり、ガンを使う余裕もない。進行方向に武器を手にしていない者がいたらどうするか？ いきなり銃を握られたらどう対処するのか？……

CQBを学ぶにはハンドトゥハンド、つまり格闘技を習得する必要がある。それも、殴る蹴るの大格闘ではなく、瞬時に敵を制圧するための特殊な技が必要だ。インスティテュートでは、この訓練に長い時間を費やす。



ここでは改良した「ホキ撃ち」を
行なってくれる。右のターゲット
は左手で持ち、クルリと反時計回
りながらターゲットを持ち替えて左手で
左側のターゲットを撃つ。



3mほどの間隔をおいて縦列に行進、並んだターゲットを次々とヒ
ットしながら歩く。昼間でも面白いが、夜は、ピカッ、バン、ピ
カッ、バンとフラッシュしながら撃つのでウーンとエクサイティン
グだった。



ハイ、ミデアム、ロウ……号令を聞きながらスタンスを変えて撃
つ。これが延々と続く。タマのリロードがシンドイ。



ガンとライトのコン
ビで撃つ。デイ
ライト下で充分な
訓練を行ない、夜
になったらライト
を点滅させながら
撃つ。手前の生徒
はマリーンのイン
ストラクター。

LOW LIGHT FIGHTER



マリーンから派遣された教官達
は、M16にベレッタM9、それ
にベネリのM4ショットガンも
使用していた。現在支給されて
いるライトは暗いので徐々にシ
ュアファイヤに変えていくの
だという。

シュアファイヤ スクールインストラク
ターコースを受講する人は、そのほとんどがミ
リタリーカポリスの現役教官だ。シュアファイ
ヤの正しい使い方を習い、公式な認定を受
け、それを自分の生徒達に伝授するために派
遣されている。今回はUSマリーンとプエルトリ
コ軍の教官も参加していた。パナマやフォ
ークランドにまで侵攻したという経歴の持ち
主もいて、役に立つ話を聞いた。他は皆ポリ
スの教官たち。皆それぞれに射撃のテクが高
いので驚いた。コチトラ、射撃に関してはメ
ッタなことではケはとらないが皆の巧さに嬉
しく感心したよ。マシンガンのスペシャリス
トがいて、そのスクールに招待してくれた。
行きたいなあ……行けるかなあ……。



M16に似たペイントボールガンを使って撃ち合う。これはセミ、フルの切り替えがあり、タマはマガジンにこめる。コイツから近くでヘルメットを撃たれるとグワーンという大音響で死んだ気がする。



キルハウスにはふたりのコンビで入る。屋内には数人の犯人がいて、バシバシと撃ってくる。緊張するよ。このふたりもそうだが、撃たれるのはタイタイ犯人役の方だ。



チョット失礼してフラッシュで撮らせてもらったが、ここはキルハウスの中。暗闇でこのようなスタンスをとりながら犯人を逮捕したり撃ったりしてルームをクリアしてゆく。



屋外に設置された多くのバリケードを使って撃ち合う。ライトを持たない犯人を追うときは楽だが「フォースオンフォース」という互角の勝負は、勝敗も五分五分になる。

ワシは、インストラクターの指定した戸口に座りこんでいた。暗黒下だった。ドアが開いたら撃てと指示されていた。ピカリ、ピカリとライトが点滅して近づいてきた。となりの部屋で騒ぎがおこり、犯人役が撃たれたようだった。しばらくシーンとなった、が、いきなり目のドアが開いた。それは銃口をドアに当てていたので解かった。人影は見えないが、上から光が差し込んだ。ワシは撃たれるのを覚悟して目が眩みながらもライトの下のあたりをバシバシと撃った。ボツと鈍い音がして「ヒートッ」と叫ぶ声があった。あとの反省ビデオ会で知ったのだが、その距離は1mもなかった……シチュアファイヤ訓練では、ペイントボールも多用する。生徒が交代で犯人とハンターの役を演じる。反撃してこないターゲットを撃つと、元気の良い人間が銃を持って向かってくるのとは様子が違うからだ。CQBという互いの息さえかきりそうな近接した闘いは様々な変化があり、それは実弾でターゲットを撃つとは大きく異なる部分がある。

攻める方も犯人役もベストを尽して撃ち合い、それを赤外線ビデオで撮って皆で反省会をするのだ。ライトを持たない犯人とライトを持ったハンターの闘い。ハンターは待ち構えている犯人から撃たれないよう適切にライトを使用しなければならない。自分の位置を悟られたら撃たれる。

こういったドリルを幾度も行なう。一般家庭のような道のりのキルハウスと、屋外にしつらえた倉庫くらいの広さにある20枚ほどのバリケードを使って撃ち合う。ライトとバリケードをどう使うかや、移動はどのように行なうかなどは実際に体験しなくては身に付かないものだ。それにしても、至近距離で受けるペイント弾は痛いよ。ボディーマーキングを着ていても足や腕をやられるとね……。



すごいヴォルヴァだが、これはサンドバッグみたいなプロジェクトイルを撃ち出す。マクイーンが『ハンター』（1980年）という映画で使ったモノの現代版。ヒットされると気絶する。死ぬことはメッタにないらしい。

カスタムの短銃身ショットガン。バレルにはマグナポートもあって魅力的。



単発と6連発がある。キッチリとシュアファイヤや装備もあり、好みによりエイムポイントなども装着できる。



H&KのUMPサブガン、シュアファイヤのM900というグリップが着いてコントロールを楽にしている。

LOW LIGHT FIGHTER



晴れて教官となったトモ。射撃の巧さでケン・グッドから賞賛を受けた。

なぜかナイフ屋のヨシも参加。撃ち合いでコンタクトレンズを落とすなどあったが、どうにか訓練をクリアして教官免状をゲット。

名も顔も出せない謎の男も目出度くシュアファイヤの認定教官になった。

わずかに4ページで、このスクールの全貌を伝えるのはフカノーだよ。ヤレヤレ。

フォトは500枚以上もあるのにな。イッシュョケンメつめこんで50枚は超えたけど、それでも伝えられるもんじゃない。

テクニク編、格闘技編、戦術編、などと3回に分けてやればイイかも。でも、そこまで詳しく知りたい読者は少ないだろうしね。

自分の好きな記事ばかりやっていると変身長がメクジラ立てるしなあ……。

シュアファイヤを使った闘いは、やればやるほど興味がのってくるよ。ストリートファイトの武器としてもイイしね。ウルサクなったらコーキだってフリーパスだものね。

では、また!

市部